

甘さと甘えの裏側で

えのころ猫草

彼女の声は磨かれたベルのように通るわけではないけれど、からこるときれいに鳴る鈴だ。だから、呼ばれればすぐに分かる。

「しゅうへー」

声に振り向くと、お付き合っている女の子がかけて来るところだった。たたた、と軽快に靴が鳴り、ゆるく編まれた髪が跳ねて踊る。

「しゅうへー、今帰るとこ？」

彼女、ふみが追いつき、横に並んで歩き出す。

小動物を思わせる女の子。よく動き、よく笑い、柔らかな西陽がよく似合う、彼女。僕が見下ろし、彼女が見上げる。

「んー……あれ、ふみは今日授業こっちなんだっけ」

「え？うん」

曜日的に今日は会わない日だけれど、彼女の取っている授業を全部把握しているわけでもないから、多分こっちで何か取っているんだろう。隣でここにこしている動物系を見ながらぼんやりとそんなことを思う。

「ところでしゅうへー、今日は何の日でしょう」

ふみの誕生日……じゃないはずだ、確か。じ

やあ何かの記念日、記念日……ああ。

「分かん」

そういうことしておこう。

ふみが途端に消沈した表情になった。

「あー……」

何の記念日か思い出した。

「男の子が女の子から何かもらえるんじゃないかと期待してそわそわし女の子もまたどこかそわそわしてデパートの地下が揺れる日」

平坦を装って声を出す。

ふみの瞳が光を取り戻した。わかりやすい。

やや大きく揺れる髪からも、機嫌が戻ったことがわかる。

自転車置き場までの少しの距離を、少し遠い学生の喧騒を聞き流しながら、歩く。

聞かれるまでもなくそういう日だということに覺えていたし、周りがいつもより少し騒がしいのにも気付いていた。

それでも気付かないふりをしたのは、少しのからかいと、自分から言ったら期待してるみた

いじゃないかという恥ずかしからだった。

それも、彼女の顔を見ていたらできなくなっってしまったのだけだ。これが、これが好きってことか。恋、ってやつか。

「バレンタインな」

努めてそうしたわけでもないのに、そっぽを向いてぶっきらぼうになる。顔をそらして斜め上を向けば、ちいさな彼女からは表情が窺えない。

「えー……はい。なので、」

ちいさな手がコート裾をつまみ、少し力をこめて握る。

「例のあれをあげます」

顔を戻すと、目の前にラッピングされた箱が突き出されていた。

小さな箱に、包装紙、リボン。ハートのシールが印象的な、それは。

「ぼつ、バレンタインの、チョコ……」

俯いたままでふみが呟く。背の低い彼女の顔は、窺えない。

おとがいに手をかけ上を向かせようとしたらすごい勢いで顔を背けられた。今どんな顔してるかなんて、見なくても分かるのに。

それでも見たいと思うのは、そんなにいけないことだろうか。

受け取った箱を、ついまじまじと見てしまう。

彼女からのチョコ。特別な甘さの、お菓子。

「あー……、ありがとう。今開けてもいいか」

「ん、……んーん」

かぶりを振られた。くせ毛がふわりと舞う。

「帰ってからでないと、許しません」

こちらを向かないままの、ふみ。しばし沈黙。

「……恥ずかしいから」

そういうものか。どうせ食べてしまうのに。

「……あー分かった。分かったからこっち向け」

「しゅうへーがそれしまつたら向く」

「あーしまつたしまつた」

ふみがやつとこちらを向いた。

「ありがとう、ふみ」

そう言った瞬間ふみの顔はものすごい速さで百面相をして、向こう側を向いてしまった。

そしてそう言った瞬間、猛烈に恥ずかしくなつて、僕は顔を背けることになった。

そのまま、仲良く顔を背け合ったまま、ぼくとふみは初春の夕暮れを歩いていった。

(恋は戦争。チョココレートの弾丸。)

「絢子ちゃん絢子ちゃんお願いします」  
「なになにふみふみ」

友をつかまえる。

「わたしチョココレートを作りたいのです」

「——は？あー……あーうん、はいはい。あれか、修平君へのアレっすか、バレンタインっつてやつですか。妬けるじゃん焼け焦けてるじゃんかふみちゃん」

「うー……えー、そうなんですがいまひとつ問題があります」

「……」

「わたしお菓子作ったことがないので」

「よし諦めろよ」

「ええー……ひどいそれでも友達ですか絢子ちゃんいいえ絢子様」

「あたしだって課題とかぶって忙しいんだよ。あと都合よく敬語を使わんでよろしい。あたしも彼氏ほしいんだけどいちやいやがってこいつは。で」

「えー……ん、はい。絢子ちゃんチョココレート作り手伝ってください。って絢子ちゃん料理できるしかわいいのになんでいないの」

わたしも絢子ちゃんくらいでいたら。

「初めからそう言えばいいじゃん。あと余計なお世話だ」

できたら、修平はもっと好きになつてくれる？

「ごめん……だって気恥ずかしいじゃん」

「いいって。作れないでしょ」

「うー……う、ん。だから、こう、毎年お菓子を大量生産しては配り歩く絢子ちゃんに」

「あー、はいはい。で、何を教えればいいの。

まさかあんた全く作ったことがないってんじゃないでしょ」

「……まあ溶かして固めたことくらいなら、去年。でもあまりに出来がひどくて……作ったのはあげられなかった」

なんとかできたそれは、べそかきながら自分で食べた。味も何も分からないチョココレート。

甘くなるはずだったのに。

「……ああ、そっか。で」

「今年も、頑張りたいのです」

「大好きな、しゅうへー君のために」  
「う……そうですよ」

「彼のために。料理苦手だけど、でも。あたしのお菓子作りと詰みかけた課題の時間を削って」

「課題なら手伝うから！」

それくらいしかできないけれど。

「だから、お願いします、絢子ちゃん」

(その色はどうめいさを隠しておきたいから。)

「……口の中が甘いを通り越して辛い」

「それは……わたしも同じ、あ、まだ一応甘い」

「あたしお菓子作るのは得意だけど他の子ほど甘いもの好きなわけじゃないのに……」

「ごめんー絢子ちゃんー。でも、課題は片付けだから、ね……?」

「あなたの頭の良さが少しでもこつちに振られていればねー良かったのにねー」

「……これできないのは絢子ちゃんまじめに授業聞いてないからだよー」

「うぐ……はいはいやりますよ食べますよ恋にがんばるふみのために」

「ごめん……ありがとう」

「はいはいごちそうさま」

(でも、気付いてほしいから、甘い。)

「そう言えば今日絢子が休んでただけど、どうしたんだろうな。なんか聞いてるか？」

「あー……あー、うん」

多分原因は、とろける弾丸だ。後でノートを持ってお見舞いに行つてあげよう。あ、あと甘くないものも。

「チョココレートの季節だから、ね」

「なんだそれ」

「秘密ー」

チョココレートは、秘密のお菓子。甘く、甘く、ほんの少し、スパイシー。

溶け出してほしいのは、あなたへの甘さ——。